# 48. 膀胱全摘術によるストーマ造設術を受けた患者のボディイメージの変容
## ―術前のボディイメージに焦点をあてて―

竹田香須美、古川祐子、久米美香、星川理恵
看護部

Ⅰ.はじめに

膀胱全摘除術によるストーマ造設術は排泄コントロール機能を喪失し、腹部にストーマを造設するため、パウチ交換など排尿に関するセルフケアの獲得が必要となり、今までの排泄行動に大きな変更が生じボディイメージの変化を伴う。ボディイメージに関する先行研究は術後のボディイメージの受け入れに関する事例検討が多く、術前のボディイメージに焦点化したものはみられなかった。そこで今回、膀胱全摘術によるストーマ造設術を受けた患者の術前のボディイメージの変容を明らかにすることで効果的な術前指導および心理的援助に対する示唆を得たいと研究を行った。

Ⅱ.方法

1.研究デザイン：質的帰納的研究

2.期間： 平成 23 年 10 月～平成 24 年 10 月

3.研究対象者：膀胱全摘術によるストーマ造設術を受け術後 6 か月以上経過した患者 8 名。

Ⅲ.倫理的配慮

本研究は所属施設の看護倫理審査委員会の承認を得てから実施した。対象者には研究への参加は対象者の自由意思によること、途中での中断・拒否が可能であること、拒否によって診療上何ら不利益は生じないことを口頭と文書で説明し、同意を得た上で行った。

Ⅳ. 結果

1.対象者の概要

対象者は全員男性で平均年齢は 71.9 歳(SD=7.8)。

2.分析結果

膀胱全摘術によるストーマ造設術を受けた患者の術前のボディイメージの変容は【身体的自信を持つ身体像】【身体的自信を喪失する身体像】【統合された全体性の喪失を感じる身体像】【ストーマ造設を受け入れる身体像】の 4 つのカテゴリーと 15 のサブカテゴリーが抽出された。

Ⅴ.考察

術前の患者は、今まで健康そのものだと信じていた【身体的自信を持つ身体像】が、膀胱がんと診断され【身体的自信を喪失した身体像】となり、はじめて脆弱になった身体を意識していた。ストーマ保有者は、自尊心にかかわる排泄部分に他者の手を必要とするため、すでに獲得した成人性の保持に関する緊張状態になると言われているが [1)]、本研究の結果でも、『手術』イコール『ストーマ造設』を意味するため、患者のみならず家族の心理的動揺は大きく、【統合された全体性の喪失を感じる身体像】というボディイメージの混乱状態に陥っていた。しかし、患者･家族は大きな喪失体験を重ねながらも、手術をして長生きしたいと、生命と引き換えにストーマ造設術を決定していた。その後ストーマ保有者からストーマを見せてもらうことや、管理方法について話を聞くことで自信をもち、【ストーマ造設を受け入れる身体像】へ変容する適応過程を辿っていたと考えられ

た。横内ら[1)]が「ストーマ保有者自らが喪失体験を乗り越え、ストーマの受容が進むよう支援することが重要である」と述べているように、術前は手術のみに焦点を当てるのではなく、患者・家族の心理的苦悩について理解を深め、患者が自己の体験を意味づけることで喪失を乗り越え、ストーマの受容、しいてはストーマを保有する新たな自己のボディイメージの再統合を促進する心理的援助が大切だと考えられる。また、先行研究[1)]と同様に本研究においても、対象者は経験者との関わりを通して自らの不安を解消していることがわかった。喪失から適応へ向かう過程を支えるためには、今後受ける手術について、自分がどのような状況になるのか、また今後の生活について想像できるような情報提供が重要だと考えられる。一方で、術前の喪失反応には個別性があるため、術前は喪失の根底には否定的な感情や不安があることを理解した上で、患者の心理受容過程をアセスメントし、そのニーズに応じた情報提供が求められる。

## Ⅵ. 結論

本研究において、膀胱全摘術によるストーマ造設術を受けた患者の術前の 4 つのボディイメージの変容が明らかになった。効果的な心理的援助と術前指導として看護者は、手術という治療選択の意思決定過程を通して、患者の苦悩を共感的に理解し寄り添う心理的援助と、個別生を踏まえつつ、今後の見通しを立てるニーズに応えた情報提供を行っていくことが示唆された。

## Ⅶ. 文献

1. 横内光子・竹井留美：直腸がんによりストーマを保有する人々へのケア，対象喪失の看護，150－159，中央法規，2010